Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞山口季音『児童養護施設の生活環境のダイナミクス―家族で暮らせない子どもの育ちと職員の実践―』学文社、2021年、236頁、定価2750円
Author(s)	三品, 拓人
Citation	未来共創. 2022, 9, p. 322-324
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88562
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評

山口季音

『児童養護施設の生活環境のダイナミクス―家族で暮らせない子どもの育ちと職員の実践―』

学文社、2021年、236頁、定価2750円

三品 拓人

本書は、教育社会学を専門とする山口季音の博士論文が元となり執筆された待望の１冊である。著者は、３年間ボランティアとして児童養護施設に携わっていた。本書は、その時のフィールドワークに基づいて書かれており、提示される数多くのデータは、子ども同士または職員との相互行為のやりとりや会話が中心である。それらを元に、児童養護施設内における子どもや職員のミクロな相互作用を分析することで、生活環境形成のダイナミクスの一端を明らかにしている。

著者は児童養護施設の環境をめぐる従来の議論において、子どもや職員が受動的な存在として扱われていたのではないかという問題関心から、子どもや職員の主体的な側面に焦点を当てている。以下で、本書の内容を要約する。

１章「家庭で暮らせない子どもの育ちと貧困」では、従来の子どもの貧困研究において家庭で暮らせないことそれ自体が例外的な状態または問題と認識されていたがゆえに、子どもの個別具体的な問題には関心が及びにくかったことを指摘し、児童養護施設を扱う意義が説明される。

２章「児童養護施設の子どもの生活環境はどのようにとらえられてきたのか」では、施設に入所する子どもの背景としての虐待と貧困、運営や職員の配置基準や職員の仕事、自立支援という側面から児童養護施設の目的が記述される。その上で、児童養護施設における集団生活の課題として、子ども集団の同調性と逸脱、学習意欲を育みにくい環境、支援体制の不足について、先行研究から整理されている。

３章「児童養護施設におけるフィールドワーク」では、調査方法や対象地、データの性質が説明される。具体的には、事例に出てくる子どもの概要や施設内のルール、職員の労働環境、著者と子どもとの関係をはじめとした情報が提示されている。

４章「児童養護施設における暴力と仲間文化」では、学習室における複数の事例から他者に対する優越を志向する仲間文化の存在が明らかにされている。そこから、児童養護施設における暴力を捉える際に、発達的・心理的な課題だけではなく、子ども集団の仲間文化への理解が必要であることが示唆される。

５章「児童養護施設における学習支援の様相」では、子ども達の学習状況に着眼し、学習環境が阻害される要因を検討される。その中で、自らの学習を進

日本学術振興会特別研究員（関西大学）；vertrauen53@gmail.com

めるよりも他者の落ち度を指摘することに夢中になるような様子が描かれる。そこからは、子どもが仲間集団へ適応することによって、自らや他の子どもを学習から遠ざけるような事態が浮かび上がる。上述のような学習の場では子どもの反発がありながらも職員はルールの厳格な適用と変則的な適用を混在させた実践を行うことで、「宿題をする」という水準での学習環境を維持している。

6章「児童養護施設職員の『即興の支援』」では、子どもによってはコミュニケーション上の課題を抱えていたり、職員にとっては「子どもに関する情報の正しさそれ自体を判断する情報」が乏しかったりする中で、その場面の文脈に依存的な職務をしている様が明らかにされている。その職務は、場の状況を悪化させず、現状を維持するために即興で行われる職員の実践であると著者は指摘している。

7章「児童養護施設の生活環境からみえるもの」では、各章の知見から本書の結論が導き出される。まず、施設環境形成のダイナミクスである。施設の中では子ども達が能動的に仲間文化を形成しており、自分たちの生活を維持しようとする主体的な子どもの実践と、文脈に応じてより効果的に支援しようとする職員の実践の相互作用によって、施設の環境が形作られていると著者は結論づける。次に、子どもの能動性や結果に至る過程を踏まえれば、施設での教育や支援の有効性を評価する際に学力や進学率といった結果のみで判断しないことが重要であることを論じている。そのうえで、本書の知見を貧困の世代間再生産の問題と結びつけての考察が展開される。施設の中では、物的な意味で勉学をする環境がある程度整っていることはもとより、子ども達は自身の保護者・家庭とは異なる様々な文化や価値観とふれあうことができる。貧困には、経済的な問題のみならず、参加が制限されつながりが形成できない「関係の貧困」という側面があるとされるが、児童養護施設にはそれらを解決する契機が備わっていることを著者は提起する。

以下では本書の意義と本書から導かれる、さらなる課題について記述する。

1点目は、本書が職員の働きかけや施設環境、その枠組みのみではなく、個々に行われる相互行為から生活の詳細と形成のダイナミクスを描き出した意義である。あらためて、児童養護施設の日常生活が子どもと職員の無数の相互行為の集積によって成り立っていることを読者に気づかせてくれる。事例は、子どもの会話ひとつひとつを再現するような形で記

述されている。

2点目として、本書には子どもが社会化される過程における他者との相互作用という社会学的な視角から施設で生じる「問題」を解釈した意義がある。一見、子どもの「問題行動」に見えても、仲間集団への適応という要因が働いていることが明らかにされる。そこから、子ども自身「悪い」と分かっているが結果的に暴力をふるわざるを得ない、気づかないうちに自らや他者を学習から遠ざけるようになってしまう、といった「意図せざる結果」が生じていることを示している。これらは、これまでの児童養護施設研究では見られなかった視点であり、相互行為による社会化という視点からアプローチした本書独自の意義でもある。

次に評者が考える課題を2点述べる。1点目に、本書の中では必ずしも明示されてはいないが、1章で整理されている社会化論や分析パートにあたる4、5、6章を見ても、著者がジェンダー論の知見から示唆を得、意識していることは明らかである。従来の児童養護施設等の研究においてはジェンダーの視点が非常に弱かったため、これらの観点から論を深めることでより本書の目的が達成されたのではないだろうか。

2点目に、本書では、最終的に学習環境だけでなく「関係の貧困」にも着眼しているが、であればこそ小学生の学習環境のみならず、貧困の再生産に歯止めをかける可能性がある他の部分にも着眼した方が、本書の目的にかなったのではないだろうか。例えば、子どもの衣服、常識の伝達、またはスポーツや習い事、様々な体験といった文化的な側面がその具体例として考えられる。

ただし、この2つの課題は本書の内在的な課題のみならず、本書から導かれる今後の児童養護施設研究の課題とも言える。

評者はより多くの人に、一度児童養護施設の生活を見てほしいという思いに駆られることがある。しかし、施設の特性上、誰もが見ることができるわけではない。だからこそ、本書のような児童養護施設内部における具体的な生活の理解――それが、ひとつの施設の中の特定の場面であったとしても――が重要である。